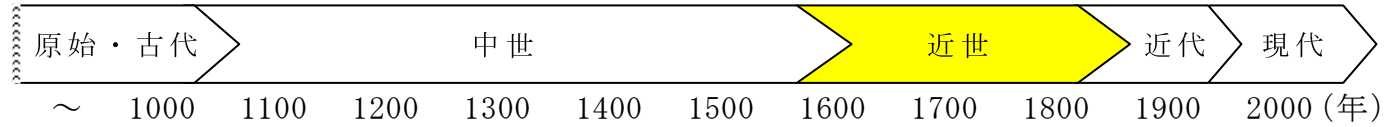


# 9 江戸時代の文化とひろしま ～菅茶山と頼山陽～

かんちやざん らいさんよう



## 1 江戸時代に活躍した広島の人にはどのような人物がいたのでしょうか？

江戸時代後半，江戸を中心に化政文化が栄えました。この時期に活躍し，大きな功績を残した郷土の人物として，菅茶山と頼山陽がいます。



菅茶山と頼山陽は，どのような人物で，どのような功績を残したのでしょうか？

## 2 菅茶山はどのような人物だったのでしょうか？

菅茶山(1748～1827)は，現在の福山市神辺町で酒造業を営む家に生まれました。

19歳の時に京都で儒学を学び，1781(天明元)年頃，神辺に黄葉夕陽村舎という塾を開きました。この塾は1796(寛政8)年に福山藩に認められ，以後は「廉塾」または「神辺学問所」と呼ばれました。

やがて茶山は，福山藩主にその力を認められて福山藩の儒学者となり，福山藩校「弘道館」(後の誠之館)でも教えています。茶山は，漢詩<sup>①</sup>人としても優れた才能を発揮し，全国にその名を知られた人物で，多くの文化人が茶山のもとを訪れました。



菅茶山肖像画  
(広島県立歴史博物館蔵)

## 3 なぜ，菅茶山は教育に力を注いだのでしょうか？

当時の神辺は，山陽道の宿場町として栄えていましたが，教育は十分に普及していませんでした。茶山は，神辺をもっとよい町にするには教育が必要だと考え，塾を開いたのでした。

茶山の豊富な知識や温厚な人柄にひかれ，全国から様々な人々が集まり学びました。茶山は，塾生のことを「学種」と呼び大切にしました。学費が払えない塾生には，生活の面倒をみながら学ばせています。

茶山が育てた「学種」が地元や全国各地に巣立ち，教育や学問を担う人材として大きく成長したのでした。



茶山の廉塾で学ぶ様子(菅波信道一代記より)  
(個人蔵・広島県立歴史博物館提供)

#### 4 菅茶山はどのような功績を残したのでしょうか？

幕府の大学頭<sup>だいがくのかみ</sup>(2)の林述斎<sup>じゆつさい</sup>は、「日本一の漢詩人は菅茶山である」と述べています。代表作の詩集「黄葉夕陽村舎詩」は、いきいきとした表現で多くの人々に読まれ、大ベストセラーとなりました。神辺の豊かな自然を詠んだ詩も多く残っています。

茶山の名声は全国に広まり、伊能忠敬<sup>いのうただたか</sup>は、測量のために立ち寄った神辺で茶山と会い親交を深めています。また、福山藩主阿部正精<sup>あべまさきよ</sup>直属の教授として江戸に赴任した際には、茶山を高く評価していた松平定信<sup>まつだいらさだのぶ</sup>(寛政の改革<sup>かかく</sup>を行った老中<sup>じんにりよく</sup>)に招かれ交流しました。茶山は神辺に深い愛着を持ち、教育の普及に尽力するとともに、神辺から優れた文化を全国へ発信した文化人でした。



「黄葉夕陽村舎詩」(菅茶山記念館蔵)

「所見」(黄葉夕陽村舎詩)  
 〈原文〉  
 落日残紅在  
 新秧嫩翠重  
 遙雷何処雨  
 雲没兩山峰  
 〈現代語訳〉  
 夕日沈んだ  
 田んぼの若苗  
 遠くで雷  
 山のとっぺん  
 雲の中  
 空まだ赤い  
 萌え重なって  
 どこかで雨が  
 雲の中  
 菅茶山ポエム絵画展 中山善照訳

□神辺のどのような光景を読んでいますか？

#### 5 頼山陽はどのような人物だったのでしょうか？

頼山陽(1780~1832)は、竹原出身の儒学者頼春水の子として大阪で生まれました。1781(天明元年)年、春水が広島藩校の儒学者として招かれたため、山陽も広島に移り住み、約30年間を現在の広島市で過ごしました。

21歳の時に脱藩騒動を起こして京都へ出向きましたが、連れ戻され広島の屋敷で5年間の謹慎生活を送りました。この期間に『日本外史』の作成にとりかかり、原型を書き上げています。

謹慎をとかれた山陽は、父春水と交友のあった菅茶山の「廉塾」に招かれます。しかし、都会に出て学問することをあきらめることができず、1811(文化8)年に「廉塾」を去り京都に旅立ちます。京都の地で塾を開き、懸命に学問に励み、ついに『日本外史』を完成させました。



頼山陽肖像画  
 (頼山陽記念文化財団蔵)

頼山陽が十四歳の時に作った詩  
 〈原文〉  
 十有三春水  
 逝者已如水  
 天地無始終  
 人生有生有死  
 安得類古人  
 千載列青史  
 〈現代語訳〉  
 十三年の歳月が過ぎてしまった  
 過ぎ去った時は戻らない  
 無限の宇宙に比べて  
 人の命には限りがある  
 どうか、昔の偉人や賢者のように  
 永久に歴史に残る人物になりたい

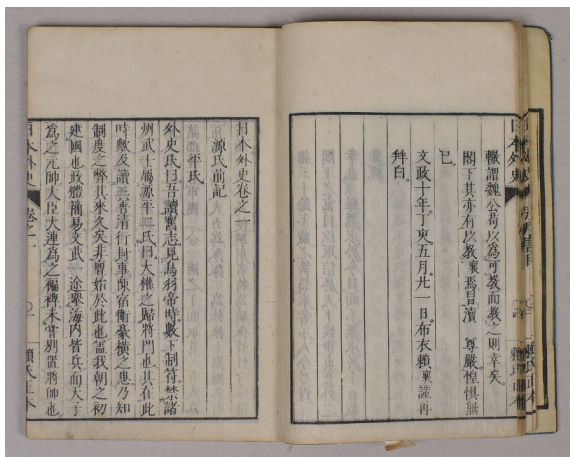
□少年の山陽は、どんな目標をたてていますか？



## 6 なぜ、頼山陽は「日本外史」を書いたのでしょうか？

江戸時代後半は、学問の研究がさかんになり、様々な本が出版されました。日本の歴史については、徳川家の一つである水戸藩において、藩主の徳川光圀が始めていた『大日本史』の編纂へんさんが続けられていました。そのような中で、山陽は、民間の人物として日本の歴史を本にまとめようと『日本外史』を書くことを決心しました。山陽は約25年の歳月ついでを費やし、「汝なんじ、草木と同じに朽ちんと欲するか」（お前は草木と同じように朽ち果てていいのか）と自分を励ましながらか、寝る間を惜しんで執筆や読書にいそしみ、努力を積み重ねました。

1826(文政9)年に『日本外史』(全22巻)は、ついに完成しました。『日本外史』は、歴史上の出来事をその場に居合わせるような臨場感のある文章で表現され、大ベストセラーになりました。多くの藩校で教科書のように使用され、幕末に大きな影響えいきょうを与える本となりました。吉田松陰や坂本竜馬も『日本外史』を読み、その影響を受けています。



『日本外史』  
(頼山陽記念文化財団蔵)

〈原文・読み下し文〉  
 (前略)夜、大江山を度り、老坂に至る。右折すれば則ち備中に走くの道なり。光秀乃ち馬首を左にして馳す。士卒驚き異しむ。既に桂川を渉る。光秀乃ち鞭を挙げて東を指し、颺言して曰く、「吾が敵は本能寺に在り」と。  
 『日本外史(中)』岩波文庫より抜粋

〈現代語訳〉  
 (前略)夜、大江山を越え、老坂に着いた。ここから右に折れると備中に行く道となる。ところが光秀は馬首を左にして駆けだした。兵たちは驚き怪しんだ。そうするうちに桂川を渡ってしまった。光秀はそこで鞭を挙げて東の方を指さし、声高らかに言った。  
 「わが敵は本能寺にあり」

□聞き慣れた語句はありませんか？

## 7 頼山陽はどのような功績を残したのでしょうか？

山陽は文学や芸術の分野でも活躍しています。武田軍と上杉軍が戦った川中島の合戦

を題材にした「鞭声べんせい粛々」の詩は、後世でも多くの人々に親しまれました。書家としても活躍かつやくし、多くの傑作を残しています。また、「耶馬溪やばけい凶卷」などの優れた水墨画すいぼくがも描いています。山陽は、高い志を持って名をあげ、後の社会にも大きな影響を及ぼした化政文化を代表する文化人でした。

菅茶山と頼山陽はどのような人物だったのか、調べたことや考えたことをもとに自分の言葉でまとめてみましょう！



### 【注】

- (1) 中国の伝統的な詩。また、その形式を取り入れて日本で作られた詩のこと。一句が四言(文字)、五言(文字)、七言(文字)からなるのが一般的。
- (2) 江戸幕府が運営する昌平坂学問所の長官のこと。

## 【もっと調べてみよう！郷土の歴史】

- 江戸時代の学問や教育について調べてみよう！
  - ・菅茶山と交流のあった文化人には、どのような人物がいたのでしょうか。
  - ・江戸時代にはどのような塾や学校がつくられ、どのような学問が教えられていたのでしょうか。
- 幕末の動きに影響を与えた学問について調べてみよう！
  - ・頼山陽の『日本外史』は、幕末の動きにどのような影響を与えたのでしょうか。
  - ・幕末の動きに影響を与えた江戸時代の学問には、どのようなものがあり、どのような影響を与えたのでしょうか。
- 身近な地域の教育や学問について調べてみよう！
  - ・身近な地域で江戸時代に活躍した文化人には、どのような人がいるのでしょうか。
  - ・身近な地域でつくられた塾や学校には、どのようなものがあるのでしょうか。

菅茶山は、松平定信や伊能忠敬のほかにも交流した文化人がいたらしいよ。



### ◇菅茶山記念館

住所：福山市神辺町大字新湯野 30-2 TEL：084-963-1885 HP

※菅茶山をはじめとする文人や神辺の画家・書家たちの作品が展示されています。

### ◇頼山陽史跡資料館

住所：広島市中区袋町 5-15 TEL：082-542-7022 HP

※頼山陽や江戸時代の広島歴史と文化に関する資料が展示されています。

## 【もっと知りたい！郷土の歴史】

### 頼山陽から学ぶこと ～12歳の「<sup>りっしるん</sup>立志論」～

頼山陽は、僕たちと同じくらいの年のときには学ぶことについてしっかり考えていたんだね。僕も努力することを大切にしていこう！



頼山陽は、幼い頃から学問に優れ、詩や文章にも才能を発揮しました。12歳の時には「立志論」という文章を著しました。その冒頭で次のように述べています。

「男児学ばざれば則ち已む。学ばば当に群を超ゆるべし」

(男子たる者、学ばなければそこで終わってしまう。学ぶことによって始めて人々より抜きん出ることができる。)

その言葉どおり、頼山陽は学び続けながら『日本外史』をはじめとする著作を完成させるための努力を最後まで惜しみませんでした。

山陽の死後、弟子であった江木鰐水(福山藩儒官)が、山陽の生前の事績を「山陽先生行状」にまとめました。その中で、鰐水は生前の山陽が語った言葉として次のように書いています。

「我を才子と謂うは、いまだ我を悉さざる者なり。我をよく刻苦すと謂う者は真に我を知れり」

(私を天才だという者は、私をよく知らない者だ。私をよく刻苦勉勵するという者は、私を真に知っている者だ。)

歳月は水のように流れ去っていくことを自覚することで、毎日を実りあるものにすることができます。頭ではわかっているけど、私たちはつい楽な方に流されてはいませんか。絶えず自分を奮い立たせて努力しなければ、そのまま年老いて朽ち果てていくだけです。努力し続けることの大切さを、頼山陽は私たちに教えてくれているのではないのでしょうか。